

学生のラーニング・アウトカムの取組みについて — 米国 Dillard University の調査をもとに —

御 厨 まり子*

1. はじめに

2012年8月に発表された中央教育審議会（以下「中教審」という）答申（「新たな未来を築くための大学教育の質転換にむけて」）により、学修行動調査、アセスメント・テスト、ルーブリック、学修ポートフォリオなど具体的な測定手法を用いたうえで明確に成果の評価について高等教育機関に「速やかに取り組むことが求められている事項」として示された。ラーニング・アウトカム（学習成果）の評価を示すことを前提にしたこの答申を含め、アメリカで起こっている教育政策と類似していることが多い。アメリカでは、近年の高等教育機関での教育費の高騰と、連邦政府の奨学金増大が問題視されていた。その学費が社会にでて活躍するに見合う費用であるのかという社会からの強い要請もあり、マーガレット・スペリングス連邦教育長官が2006年に A Test of Leadership（以下「スペリングス・レポート」という）を発表した。

塩沢は、そのスペリングス・レポートの中で「高等教育の質の保証の1つとしてラーニング・アウトカムの重視とその比較可能な測定を標準化したテストを行うことを、高等教育機関に迫った」としている。また、塩沢は「スペリングス・レポートの2年後の2008年答申（学士課程教育の構築に向けて）」では、「学習効果」とラーニング・アウトカムを言い換えて取り入れ、都度63回にわたっても用いながら、ラーニング・アウトカムの重要性を説くことになった」という。

本稿では、2013年8月27日に、アメリカの高等教育機関の調査を行っている「大学経営戦略研究所」による米国訪問調査（団長；船戸高樹現九州共立大学教授）に参加し、ルイジアナ州ニューオリンズの Dillard 大学を訪問した。Yolanda Page 教授（Vice President for Academic Affairs）より「Assessment of student learning at Dillard University」について Dillard 大学での学習成果（ラーニング・アウトカム）の具体的な取組みのヒヤリング調査した結果を踏まえ検討をおこなうものとする。

2. Dillard University のラーニング・アウトカム

2-1. Dillard 大学の概要

Dillard 大学は、アメリカ合衆国の中でも南部のルイジアナ州のニューオリンズに位置する私立大学である。大学の設立は、“黒人に教育を”として1869年に設立された。キリスト教会とメソジスト教会により Straight University と Union Normal school という学校が設立され、1930年両校が合併し現在の Dillard University となる。1932年病院を設立し、ルイジアナ州の中でも最も早く看護学部を設置した。現在もアフリカ系アメリカ人が在学生の95%を占めている。教員の3分の2は最終学歴として博士号を取得しており、80%の学生はキャンパス内に住んでいる。敷地は55ヘクタール（550,000㎡）であり、東京ディズニーランド1個分（510,000㎡）と東京ドーム（46,755㎡）1個分を

* 明星大学明星教育センター事務室課長

合わせた敷地となる。Dillard 大学は、36 の専攻があり、人気のある専攻分野は公衆衛生、臨床科学、看護・看護師、ビジネス、マス・コミュニケーション/メディア研究といわれている。Dillard 大学の概要は表 1 のとおりである。

US ニュースのホームページにおいても、2012 卒業生の最も人気のある専攻としては、公衆衛生 18%、看護/看護師 15 パーセント、経営管理 11 パーセント、マスコミュニケーション/メディア研究 9%と記載されている。



写真 1, 2 Dillard 大学構内。大学カラーは、青と白

表 1. Dillard 大学 基本データ

設立 形態	1869 年 私立大学
敷地面積	55 ヘクタール
学生数	1,307 名 (男子 28%女子 78%)
教員と学生の比率	14 : 1
教室 (平均人数)	19
4 年間の卒業率	14%
GPA	2.5 以上
入学許可率 (合格率)	33.4%
アドミッション	8 月 1 日
1 年次入学生受け入れ数	340 名
SAT・ACT スコア締め切り	6 月 15 日
SAT スコア	870
ACT スコア	18 以上
授業料	16,191 ドル (2013-14)
書籍費 等	12,000 ドル
2012 基金	48,853,883 ドル

引用：Dillard 大学 大学ホームページより

2-2. Dillard 大学でのラーニング・アウトカム導入の背景

Dillard 大学では、学生に対して大学における学習と学外における課外活動を課しており、大学で様々な経験をしたことを、アセスメントを含むアウトカムで、学生のラーニング・アウトカムを実施している。

もともと、Dillard 大学は、全米 10 地区の基準協会の一つである南部地区基準協会 (Southern Association of Colleges and Schools Commission on Colleges、以下「SACS」という) の所属であり、現在は 2020 年までの認証を受けており、2015 年に 5 年目に出す中間レポートの準備を進めている。Dillard 大学も他の米国大学同様に Dillard mission と vision

が掲げられ、それを達成するために戦略、ゴールが設定されている。その Dillard mission に基づきながら大学の質を保証するプログラムを構築されている。それを「The Quality Enhancement Plan（以下「QEP」という）」と呼ぶ。このプログラムの基準は、SACS からの指示に基づくもので、それは各地区基準協会に対して、質が保証されているかを監視せよというアメリカ連邦教育省（US Department of Education: USDE）の指示を基礎としているものである。この SACS のスタッフが、常に大学を監督し、大学の質を維持されているかどうかチェックしている。SACS の基準から外れると、アグレディテーションが認証されなくなり、併せて教育省に対して報告されることになる。アグレディテーションを維持することは、大学にとって連邦政府・州政府からスカラシップが提供されるため、極めて重要な意味を持つ。仮に認証評価を受けられないとすると、スカラシップがキャンセルされ、学生に対して奨学金が給付されなくなるからである。

Dillard 大学では、在籍している 9 割の学生が何かのスカラシップや経済的支援を受けているのが現状である。学生たちを経済的にサポートしている家庭環境が財政的に豊かでない学生が多いため、スカラシップをキャンセルされることは、大学にとって学ぶ学生がいなくなるという現実も抱えている。

2-3. Dillard 大学のミッション

アメリカの大学には、ミッションのもとに大学が設立されている。使命を遂行するために大学教育が行われているため、ミッションはより明確に示されていることが多い。

Dillard 大学では、下記のディラードミッションとビジョンを掲げ「優れた卒業生を輩出するために、世界の指導者となって広く教育され、文化的に認識した知識人を養成する」ことに力を入れている。

Mission and Vision

Dillard University's mission is to produce graduates who excel, become world leaders, are broadly educated, culturally aware, and concerned with improving the human condition. Through a highly personalized and learning-centered approach, Dillard's students are able to meet the competitive demands of a diverse, global and technologically advanced society.

2-4. QEP の目的

QEP の目的は、Dillard 大学の QEP ゴールを達成させることであり、その目的は「現実社会について必要な力を身に付け、それらの力をカリキュラムだけに限らず、学外のアクティビティー等の経験を通じて身に付けさせていくこと」としている。特に、この下記の 3 点がコミュニケーション力を身につけるために、必須といわれている。

- ・ Reading analytically
- ・ Writing analytically
- ・ Speaking and presenting effectively

QEP ゴールの設定の具体的例は、Dillard 大学を卒業する卒業生は、全員がライティング、数学、化学 の 3 つの分野においては、4 年間で習得した知識が、大学で設定している基準をクリアしなければ卒業ができない。2013 年の QEP は、「コミュニケーションスキル強化」が追加されている。

3. アセスメントの実施

Dillard 大学において経験しなければならないことについて、Student Learning Outcome（以下「SLO」という）アセスメントを実施している。勉強で身に付く内容について測定するアセスメントと、社会につながる大学外への行為についてのアセスメントを行う。Dillard 大学の卒業生は、ディラードエクスペリエンスという誇りをもって卒業をする。そこに至るまでは、大学が独自に課しているラーニング・アウトカムで測定する。アセスメント計画が含まれている下記の3つのコンポーネントが計画されており、学生のラーニング・アウトカムを確認していく。学年進行にて表1に示すような内容で示されている。

- ・ 定期的な測定を解析できるプログラム・アセスメント
- ・ 学生のラーニング・アウトカム
- ・ 学部と教育効果の測定

3-1. 定期的な測定解析できるプログラム・アセスメント

① the Collegiate Learning Assessment

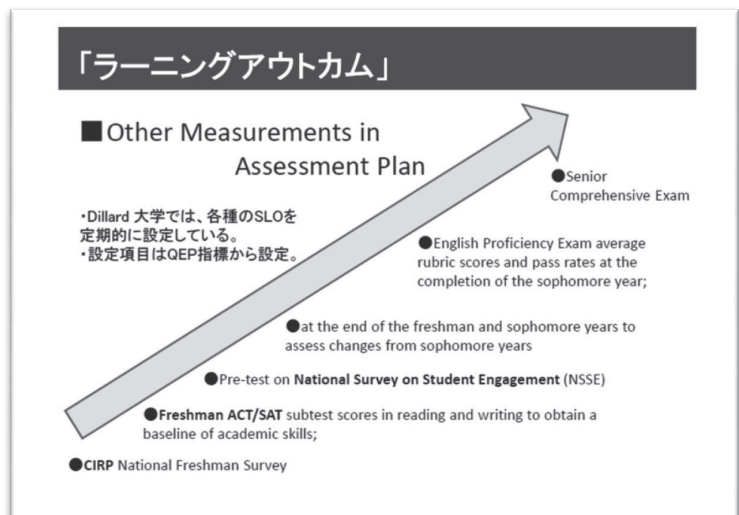
入学後3週間後に、the Collegiate Learning Assessment(以下「CLA」という)のアセスメントを実施する。コミュニケーションスキルと新入生の論理的思考を測定する。学生が現実的な状況で質問し回答させ、批判的思考、分析的推論、問題解決を使用しコミュニケーションスキルをみていく。2年後に、再度アセスメントをして効果測定をする。

②その他のアセスメント

その他にも、各種のアセスメントを定期的実施し、測定する。QEPの指標に基づき設定をし、学年進行でSLOを実施される。基準も学年別に設定されている。(表1参照)。そのアセスメントは、学内での設計もあるが、外部の専門団体が作成しているアセスメントを使用し、学外と学内の双方での確認をしていく方法をとっている。アセスメントとしては利用されているのは以下の通り(図1参照)である。

- ・ CIRP National Freshman Survey
- ・ ACT / SAT Freshman subtest score
- ・ NSSE Pre-test
- ・ English Proficiency Exam average rubric scores
- ・ Senior Comprehensive Exam

図1 その他のアセスメント



筆者がヒヤリングをもとに作成

表 1 Dillard 大学の学年別の SLO

<p>■ Course Embedded Assessment of Student Learning Outcomes (SLOs)</p> <p>● Expected SLOs for the 1st Year Experience</p> <ul style="list-style-type: none"> • Objective 1 • By engaging in the LCs, at the end of the 1st Year Experience, for each cohort during 5years, at least 70% will be able to: <ul style="list-style-type: none"> • complete an analytical reading and reflective writing integrated assignment with a score of 3 or higher on the DU / Washing State CT rubric. • complete a content-specific presentation on academic content from the student' s proposed major area with a score of 3 higher on the appropriate component of the DU/ Washington State CT rubric. • Complete a student engagement group project with accompanying personal written reflection using critical thinking skills of synthesis and evaluation with a score of 3 or higher on the appropriate DU/Washington State CT rubric. • Increase the level of engagement in critical thinking learning projects with a 5% increase of frequency of positive ratings as measured by the NSSE survey questions. • Objective 2 • By participating in student engagement co-curricular activities in the freshman cohorts,70% of the students will be able to: <ul style="list-style-type: none"> • write a reflective essay about the interactive learning experience demonstrated during the co-curricular experiences that connect learning to solving real-world problem with a score of 3 or higher on the appropriate DU/Washington State rubric.
<p>■ Expected SLOs for the 2nd Year Experience</p> <ul style="list-style-type: none"> • Objective 1 • By engaging in the LCs, at the end of the 2nd Year Experience, for each cohort during 5 years, at least 75% of the students will be able to: <ul style="list-style-type: none"> • complete an analytical reading and reflective integrated writing assignment with a score of 3.5 or higher on the appropriate component of the DU/Washington State CT rubric in a discipline-specific course. • Complete a content-specific presentation on academic content from the student' proposed major area with a score of 3.5 or higher on the appropriate component of the DU/Washington State CT rubric in a discipline-specific course. • Increase the average score on the Writing Proficiency Exam by 5% from baseline assessment administered at the end of the 2nd Year Experiences. • Increase the level of engagement in critical thinking projects with a 5% increase of frequency of positive ratings as measure by the NSSE survey questions. • Complete an integrated critical reading assignment focusing on the experience of the co-curricular activity, such as a community service project or field trip experience, With a score of 3.5 or higher on the appropriate component of the DU/ Washington State CT rubric.
<p>■ Expected SLOs for the 3rd Year Experience</p> <p>Completion of one or two integrated critical thinking assignments with a score of 4.00 or higher on the appropriate component of the DU/Washington State CT rubric in selected major courses.</p>
<p>■ Expected SLOs for the 4th Year Experience</p> <ul style="list-style-type: none"> • Completion of one or two senior-level integrated course assignments in the capstone courses in each major with a score of 4.0 or higher on the appropriate component of the DU/Washington State CT rubric. • Completion of the senior research project/ capstone course SLO/senior performance portfolio with a score of component of the DU/Washington State CT rubric. • Write a reflective paper on the overall electronic portfolio artifacts with a score of 4.0 or higher on the appropriate component of the DU/Washington State CT rubric.

※ 2013.8.27 現地ヒヤリング資料より抜粋

4. データの蓄積と活用

QEP プログラムは5年間で、すべての測定値から収集・照合させていく。そのデータを QEP アセスメント分科会によって分析される。また分析の結果は、QEP ディレクター、QEP 委員会に事務局に報告され、その結果は、Institutional Reserch（以下「IR」という）事務所に保管されデータが蓄積される。

QEP 目標の成果を評価するために、各学生のデータベースは、ライブテキストポートフォリオ評価システム（E-learning）に蓄積され、保存は10年間となっている。テスト、アセスメント等の情報をファイルにまとめられ、10年に一度のアグレディテーションに活用する。

5. Dillard 大学での SLO について（まとめ）

①教育の質としてアセスメントを活用し効果的に測定をする。

Dillard 大学は、1300 名程度の小規模大学で、学生募集に苦戦を強いられている。経済的支援がないと学業が継続できず退学をする学生が多いことから Dillard 大学の置かれている現状は日本の大学に非常に近い感覚であった。財政的にも、学生募集で確保できなければ、質の良い教職員も確保できなくなる。仮に、教員が招聘できないと学部教育プログラムの変更を余儀なくされ、予算内で実施できる教育プログラムを再考しなければならない。そうすると、最悪、学生募集時の情報と異なる教育プログラムを提供することになる。故に、エンrollment・マネジメントで学生募集を行い、IR 機能を持たせ、Dillard 大学のラーニング・アウトカムを評価してもらうしかないのである。教育の質を維持するために、アセスメントを活用し効果的に測定していく。その結果を、学生の現状分析に活用し、IR 機能を持たせ、戦略的に QEP を達成させていくことになる。

②外部団体のアセスメントを活用してのアセスメントプログラムを設計

Dillard 大学で定めている分野・基準を明確に設定し、質の保証を確保することで社会からのニーズを応えることになる。アセスメント設計するには、莫大な費用と経験ある人材、時間が必要とされる。また、当該大学だけでの評価では、不十分であることから、外部の専門団体で設計しているアセスメントを効果的に使うことで設計費用・人・時間の負担も圧縮される。また、他大学との比較分析にも可能となり、次大学の置かれた現状も把握することが出来る。

③学修記録の活用

またEポートフォリオで学生のレポートなども、IRの観点から10年間はアーカイブされる。学生がどう成長したか、学習したかの状況を把握するには、アグレディテーションでの学生ヒヤリングとともに重要視とされているからである。但し、Yolanda Page 教授によると、「外部アセスメントだけでは完全なアセスメントはできない」という。また、「大学全体のアセスメントには外部アセスメントは効果的ではあるが、大学独自で掲げた到達目標を測る意味では外部アセスメントは完全ではないので、大学独自での測定できるアセスメントは必ず必要である」という。現在（2013年）、Dillard 大学独自のルーブリック開発を Yolanda Page 教授のもとで設計中である。

6. まとめ

アメリカの高等教育機関での教育政策が、いわば日本の教育改革に導入されていることが多くみられることから、現地調査から学ぶ点はとても多い。アメリカの大学の場合、ミッションとビジョンを達成するためにアセスメント

設計がなされていく。よって、今回の Dillard 大学においても、①大学全体の基準でベンチマークがなされ、②学生の身につける力として、③学部教育の教育効果をアセスメント活用しながら、授業科目や学外カリキュラムを詳細に PDCA サイクルがまわせるように設計、IR 機能を持たせながら分析をしていることがわかる。

一方日本においても、中教審答申の学士課程教育の質的転換へ好循環させるためには、質を伴った修習時間の増加・確保とともに、「教育課程の体系化」「組織的な教育の実施」「授業計画（シラバス）の充実」「教員の教育力向上を含む諸課題を進めるための全学的な教学マネジメントの改善」との諸方策との改善をするべきと指摘している。

特に「大学全体、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を習得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示され」た「教育課程の体系化」を求めるものとなっている。また「組織的な教育の実施」についても、「往々にして大学の授業（授業科目）は個々の教員の責任にゆだねられ、教員の専門性に引き付けた授業科目の設定が行われてきたが、学士課程教育の質的転換のためには、教員全体の主体的な参画による教育課程の体系化と並んで授業内容やその実施に関わる教員の組織的な取り組みが必要である」と指摘している。

大学教育が学校教育として位置付けられ、学生にとって組織的な教育を実施していく上では、今回のアメリカでの調査によって明らかになった内容は、日本における今後の大学教育の在り方を考える上で示唆に富むものであった。特に、大学教育の使命を明確に定め、その実現状況について、学生がどの程度身につけているかを、学年進行で学生の SLO を設定し評価するために、アセスメントを導入していることは、アセスメントの本来の意味を実現している良い事例であった。またアセスメント活用とともに各ルーブリックの設計が一体となっていることで、IR の機能からしても、組織的に学生の成長が社会からのニーズにこたえているかどうか、大学としての役割を果たしていることがわかるという点についても、今後の日本の大学における組織的な教育の実施という点で参考になると考えた。大学はそれぞれ異なるミッションを持っている。船戸は「ラーニング・アウトカムは大学・学生の質も多様。故に大学数だけアウトカムが存在する」という。今回の調査結果をもとに明星大学の実態についても検討し、そのあるべき姿としてのラーニング・アウトカムおよびどのように体系的にアセスメントを把握し活用するかも筆者の今後の課題としたい。



写真 3 Yolanda Page 教授を囲んで集合写真

参考文献

- 1) Dr.Yolanda W.Page — Assessment of student learning at Dillard University 2013.8.27 現地ヒアリング資料
- 2) David D.Page — Enrollment Management An Overview 2013.8.27 現地ヒアリング資料
- 3) 塩沢一平「米国リベラルアーツ・カレッジによる教育とラーニング・アウトカムの評価の現状」山梨学院大学『経営情報学論集』第 20 号
- 4) 船戸尚樹「米国の大学研修基調報告」2013 年 10 月 5 日報告会資料
- 5) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」2012 年 8 月 28 日

WEB Site

- アメリカ合衆国 連邦教育省 <http://www.ed.gov/>
アメリカ合衆国 南部地区基準協会 <http://www.sacs.org/>
アメリカ合衆国 デイラード大学 <http://www.dillard.edu/>
US ニュース <http://www.usnews.com/education>
US ニュース 大学編 <http://colleges.usnews.rankingsandreviews.com/best-colleges>